

たてたりけるを、いかにも人にかす事などもなくて、秘藏して持たりけるにのりて、通方の大納言の、いまだ殿上人にておはしける時、かの亭へ参りたりける程に、にはかに雨ふりければ、いそぎたちて此くるまを門の中へ引入て、くるまやどりなる、亭主のくるまをば引出して、雨にぬらして、おのれがくるまを、くるまやどりに立てける。所司見つけて、いかにかゝる事をばするぞと、とがめければ、殿はいくたびも、調じかへ給はん事やすかるべし、定茂が一車をぬらしては、又調じがたければ、かくしたるぞといひければ、所司力およばずやみにけり、

〔輿車圖考〕叙予尙古の志ありて、汲古の學をなし、ことに本朝の故實にうとし、この頃平家物語の畫圖を企つ、車の制においては、古畫もまたまぢくにして辨じがたし、故に志をたて、去年の夏の半比より、車のことかいたる文などみたれども、もとより分明ならざることのみおほければ、東都の隱士稻村行教をまねきて、車の故實などとふ、この人汲古の學にくはしく、よく考索を盡してうまざる人なれば、さまざま古書を抄出し、考證をそなへて、よりくもち來る、よてこのくるまの畫圖をかうがへはじめしなり、畫は渡邊廣輝に、予みづからさし教へてかゝしむ、考證は行教の説をおほくあぐるのみ、もとより縉紳家へもたづね、または橋本經亮などへもとひものしたるが、こゝにて分明ならざること、は、かしこもまたおなじ、只行教の丁寧を盡して、考索の精をまされりとす、稿終りぬれば、校合を行教にこひ、また屋代弘賢にもえめす、故にその説をも少しくこゝに加ふ、予はたゞ論説のちからもなく、取捨の識もなければ、心を盡して編集して、他日の遺忘にそなへんとす、もとより此後古書古畫など、よりどころとなるべきもの見出したらば、おひくにかきくはへ、全備すべきものなり、世の人新著述のものをみては、其益ある事をばいはでいさゝかのあやまりなどを、たゞにあげ侍る輩少なからず、もとよりこれは論にもたらず、たゞこの車輿の事は、中比さへも、すでにわかりがたき事侍るめるに、今の世にて、かくたゞ